

坂下 徳治（さかした・とくじ）

1、プロフィール

詩・新短歌の制作を通し、自己を告発し続け、百田宗治の「椎の木」を中心として活躍。真理の実現のため自ら志願し陸軍軍人として終戦の年 33 歳の若さで戦病死。

<生没>

1912(明治 45)年1月 25 日 ~ 1945(昭和 20)年8月4日

<代表作>

詩集『招待状』『偽経』

<青森との関わり>

三戸郡館村(現八戸市)に生まれ、ほとんどを県内にて活躍。明治尋常高等小学校、県立八戸中学校卒業。

2、作家解説

坂下は鋭い刃を胸につきつけながら、孤独を絶叫し自己を告発し続けた詩人とと言える。これは幼年時のあいつぐ凶作で疲弊していた農村の暗い表情の記憶を、自己の内部にあるイメージと重ねていったからである。こうした詩人としての作業は精神的な変容の過程を経て、言語表現としての詩の方法にも変化を加えて、彼の内部にある原風景の領域となっていった。不安に揺れ動く原風景は当時の時代の動勢からも影響を受けたものであろうが、日常体験の意識からはぐれて、退廃、孤独といった反社会的意識へと傾いていった。

昭和6年八戸中学校卒業後、進学を志したが弟妹が幼かったため家業の精米・製粉業に従事し、かたわら百田宗治編集の雑誌「今日の詩」に作品を発表し、第三次「椎の木」(百田宗治編集)の同人となった。翌7年には草飼稔とリーフレット「波止場」を発行した。またこの年に第一詩集『招待状』を刊行した。9年には椎の木社同人共同詩集『春燕集』に参加、作品を収録し、まもなく「椎の木」を退き

「詩法」同人となり、この時からペンネームを坂下十九時とした。10年には山田キミと結婚し、翌11年に上京、約三カ月滞在し、第二詩集『偽経』を刊行した。13年には草飼稔の勧めで新短歌を作り、新短歌誌「磁場」に属し『年刊新短歌』（第一書房1938年版）に作品が収録され、新短歌誌「橋」を発行した。

この13年10月に北支方面の陸軍宣撫班員を志願し北支に派遣された。軍の召集令状ではなく、生きる証のために「義務」よりも先に「真理の実現」を希望して敢えて厳しい環境の中に身をさらして、得体の知れないロマンを求めていったのであった。（参考文献『青森県詩集』下巻）